

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-12

岡島敏元常務理事オーラル・ヒストリー：法政大学史資料集第42集

AKETAGAWA, Tohru / KITAGUCHI, Yumi / NESAKI, Mitsuo / OKAJIMA, Satoshi / 北口, 由望 / 明田川, 融 / 根崎, 光男 / 岡島, 敏

(出版者 / Publisher)

HOSEIミュージアム

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEIミュージアム紀要 / BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

129

(終了ページ / End Page)

157

(発行年 / Year)

2024-03-13

III 資料編

法政大学史資料集

第42集

岡島敏元常務理事オーラル・ヒストリー

目次

岡島敏元常務理事オーラル・ヒストリー

2023年2月24日

2024年3月

法政大学史委員会編集

『法政大学史資料集』は1978年3月に法政大学百年史編纂のため刊行がはじまり、大学の歴史に関する資料集として古い歴史があります。百年史完成後も大学史の解明のために刊行が継続され、2021年3月刊行の第39集以降は『HOSEI ミュージアム紀要』に収録されています。

解題

法政大学史委員会

根崎 光男

本オーラル・ヒストリーは、法政大学元常務理事・名誉教授の岡島敏先生の理事在任中における大学行政および工学部運営の内実を理事の立場から語っていただいた口述記録である。本インタビューでは、1990年5月～1993年4月までの常務理事在任中、および1993年5月～1996年4月までの理事在任中の大学運営のみならず、その生い立ちから32年間にわたる法政大学在職期間中のお仕事ぶりを中心に幅広くお話しいただくことにした。なかでも、岡島先生は工学部の教員から常務理事および理事を合計6年間にわたって務められた経歴があり、工学部教員からみた学部運営および大学運営についてもお話がおよんでおり、大変貴重な内容となっている。そこで、法政大学における教学の歩みのなかで、岡島先生の口述記録の内容をつぎの4つの視点からまとめておきたい。

その前に、岡島先生の履歴を通観しながら、その歩みを確認しておきたい。岡島先生は1940年北海道に生まれ、水産業を営む父の仕事の関係で小学校高学年から秋田市に移り住んだ。理数系を得意とした岡島少年は、高校の化学教員に勧められ、1959年法政大学工学部機械工学科に入学した。当時、工学部は麻布に校舎があり、校舎は古く「馬小屋」同然であったが学生はみんな真面目に勉学に励み、学部の評価は他大学を凌ぐ極めて高い位置にあったと述懐している。

1963年の学部卒業後、同大学院工学研究科修士課程に進み、1964年4月に小金井校舎竣工につき移転、1967年3月に修士課程を修了した。キャンパス移転を含め、本学工学部が大きく変化していく時期でもあった。その後、指導教授の推薦で東京大学工学部航空学科研究生として最先端の宇宙開発にかかわる無重力燃焼研究に専念、博士の学位を取得するなど、7年間を過ごした。そして、1974年4月、母校から誘いがあり、法政大学工学部専任講師として着任した。

このころ、工学部は「工学部整備五ヶ年計画」を策定し、その実現に向けて奔走することになった。しかし、学科の増設や再編は校地・校舎が大学設置基準に適合しておらず、このため文部省には1年次の教育を木月校舎で行うという約束で認可を受けてきた経緯があった。

それでは、岡島先生の常務理事・理事在任中の業務を振り返りながら、当時の課題への取り組みについてみていきたい。第一に、岡島先生が1990年3月に工学部教授会の推薦により常務理事に立候補して当選した。このころ、工学部は学科再編ではなく、工学部の理工学部への改組に取り組むことになった。当時、工学部内では経営工学科・電気工学科の一部を情報やシステムをキーワードとする学科に改編する案が提案され、それに加えて従来からの悲願であった機械工学科の化学機械コースおよび電気工学科の計測制御専攻をそれぞれ学科として独立させ、さらに物理学科を新設して、物理・化学・情報で理学系学科を構成し、従来の工学系五学科と合わせて、理工学部へ改組しようとしていた。この件について、岡島先生は文部省との折衝を担当することになった。ところが、1991年11月の最初の折衝で工学部

の理工学部への改組は困難との感触であり、申請もできなかったという。この背景には、法政大学が市ヶ谷キャンパスの新学部設置交渉で文部省の不評を買っていたという事情もあったが、岡島先生は「やはり工学部の責任です」と述べている。同様の折衝は他大学でも行っており、本学だけでなく、他大学でもうまくいかなかったようである。

この点について、岡島先生はインタビューのなかで「工学部の中にけっこう矛盾がありました。例えば、機械工学科の中に化学があって、その化学の先生が学部の3分の1ぐらいを占めていました。それを全部、きれいに整理したほうが、入るほうもわかりやすいし良いんじゃないか。そういうことがあって、学科再編でまず進めて、それから『理工学部』だという話になりました」と述懐している。こうして、工学部のままでの学科再編を進めていくことになった。その結果、1992年12月に物質化学科・電子情報学科・システム制御工学科の新設が文部省より認可されるなど、工学部の学科再編が実を結んでいったのである。

第二に、工学部の多摩移転問題について、『法政大学と戦後五〇年』では「[工学部長 ※筆者補足] 岩下の主張する『工学部多摩全面移転』に対して、教授会懇話会の席で、河原一郎（建築学科）の都市型大学論に基づく『小金井再開発』の主張が真っ向から対決して、教学面からの要請よりも財政面からの制約を重視した全面移転論に不安を抱いていた若い教授会メンバーが、河原の時代を見越した正論に安堵しながらも固唾を吞んで議論を拝聴したのもこのころである。岩下の全面移転論は、小金井再開発の可能性を小さく見積もっており、小金井校地の売却によって、費用を捻出し、大学設置基準に関しての校地問題のない多摩校地に移転しようとするもので、場合によっては工学部移転跡の小金井校地に吉祥寺にある付属第一中・高等学校が移り、第一中・高等学校の敷地を売却して移転費用にあてる、というものであった。しかし、大量輸送機関がないという多摩校地の交通問題には何の見通しもなかった。他方、河原は小金井再開発の可能性を示し、工学部としては小金井を離れるべきではないという論であった」（560頁）と記述されているのに対して、岡島先生は教授会懇話会の席上で個人的な意見が出されただけであって、教授会が二分されたということはまったくなく、揉めたこともなかったと述べている。大学の歴史においては、客観視した公平性の高い記述が何より重要であることを示しているように思う。

第三に、理事時代の岡島先生が主導されたものに、大学院工学研究科定員の拡充がある。大学の財政健全化のため、大学院の修士課程の定員50名を一挙に300名へと増員し、また博士課程についても定員8名を16名へと増員しようという申請を行い、文部省は社会的な要請を受けて認可し、1995年度から実施された。当時、文部省は大学院の充実を文教政策の柱の一つに掲げて推進しようとしはじめていた時期であり、ちょうど時期的にも幸いした。本学側も簡単に認可されると思っていた大幅な定員増であるが、その後の大学院拡充を容易にする大きな布石となっていたのである。

第四に、岡島先生は常務理事時代の多くの業務分担のなかに国際交流センターが入っており、ご自身も「国際交流は得意でした」と述べている。理事時代の1994年度には国際交流センター事務部長も兼任され、国際交流の推進に尽力された。その後、1995年9月には韓国延世大学に、1996年4月にはインド科学大学院大学に、いずれも下森定総長とともに学術交流の一環で訪問していた。インド科学大

学院大学はインド唯一の大学院大学で、難関大学院大学として知られているが、岡島先生は40歳ごろ同大学に1年間客員教授として赴任していたことがあり、それ以降少なくとも年1回は研究のためインドを訪問していたという。研究などでの海外出張が数多くあったことで、外国の大学との交流にも手慣れており、最適任者であったといえよう。なお、これらの出張を国際交流委員会で報告したところ、総長と理事の二人だけで出張したことに危機管理上問題があるとクレームがついたという件についても話していただいた。

このインタビューの関係で、岡島先生のご自宅に二度訪問することになった。1回目は2022年7月19日、インタビューに向けての打ち合わせとその内容確認のためにうかがい、そのなかで正式なインタビューは1回だけとすることに決定した。そして、2回目はインタビュー当日の2023年2月24日であり、午後2時～5時までの3時間にわたって行った。何より、現在でも研究への情熱は衰えず、仕事を精力的に継続されていたことに驚かされた。インタビューでのお話の節々で法政大学への変わらぬ愛情も感じたし、後進の教員として、先生が教員へのメッセージとしておっしゃった「存在感のある」教員になってほしいというお言葉は身の引き締まる思いでお聞きした。なお、毎回、お茶を出していただいた岡島先生ご夫人・岡島榮子様も法政大学工学部の卒業生であり、麻布時代の工学部の様子などのお話をうかがった。ご多忙のなか、私どものプロジェクトに長時間にわたってご協力いただいた岡島先生と奥様に対して、深く感謝の意を表します。

岡島敏略歴

1940年 北海道生まれ 1951年 秋田県に転居

1963年3月 法政大学工学部卒業

1967年3月 法政大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程修了

1967年4月 東京大学工学部航空学科研究生（1974年3月まで）

1974年4月 法政大学工学部専任講師

1976年4月 法政大学工学部助教授

1981年4月 法政大学工学部教授

1990年5月 法政大学常務理事（1993年4月まで）

1993年5月 法政大学理事（1996年4月まで）

1994年4月 法政大学国際交流センター事務部長（1995年3月まで）

2006年3月 法政大学を定年退職

2006年4月 法政大学名誉教授

岡島敏元常務理事オーラル・ヒストリー



開催日 2023年2月24日(金)

場 所 岡島敏先生ご自宅(東京都)

出席者 岡島 敏(法政大学元常務理事)

根崎 光男(法政大学人間環境学部教授)

明田川 融(法政大学法学部教授)

北口 由望(法政大学HOSEIミュージアム学芸員*当時)

目次

1. 法政大学入学以前
2. 学生・院生のころ
3. 法政大学の教員に就任
4. 研究に集中
5. 学生運動
6. 教学改革と多摩移転問題
7. 常務理事時代
8. 「理工学部」への改組を断念
9. 小金井再開発へ
10. 大学院の拡充と学科再編
11. 国際交流
12. これからの法政大学へ

1. 法政大学入学以前

根崎 総長、理事経験者の方々にオーラル・ヒストリーということで聞き取り調査をしています。今回、先生には、工学部の再編に絡むことと、理事時代のお仕事の関係の特にお聞きしたいと思います。最初に、少年期からお伺いしていきます。よろしく願いいたします。それでは、先生のご出身地は北海道の根室市ということでしょうか。

岡島 生まれは、北海道根室市です。生まれた時は、第二次世界大戦が始まった時でした。

根崎 小学校まで根室でしたか？

岡島 小学校の途中まで、5、6年生の頃までいたと思います。その後、秋田に引っ越しまし

た。

根崎 それはご両親の都合ですか。

岡島 うちの水産業をやっていて秋田に支店がありました。父が軍隊で、駆逐艦か何かの艦長をやっていて、戦争が終わって水産業をやり始めました。

根崎 小学校の途中までは根室にいて、中学校ご卒業は秋田でしょうか。

岡島 秋田の土崎中学校というところです。

根崎 その後、履歴書によりますと、秋田短期大学附属高校に入学されていますね。このあと工学部の先生になられるわけですが、理系の目覚めというのはいつでしたか？

岡島 理系の目覚めは、理科が好きだったことだと思います。

根崎 中学生ぐらいから？

岡島 中学生ぐらいからです。理数系が好きでした。それで、算数か数学の時によく手を挙げて黒板に書くことを、いつもトップでやっていました。

根崎 得意だったんですね。

岡島 私の兄が非常に優秀だったので、その弟も優秀だと思われたらしいです。ですから、やむを得ず勉強しました（笑）。いま考えればそんな感じがします。

根崎 お兄さんが優秀だと、それもプレッシャーですよ。

岡島 先生に、「おまえも優秀だろ」と言われて、勉強は大嫌いでしたが、その言葉で一所懸命、勉強し始めたと思います。

根崎 秋田で附属高校を卒業されて、その後、法政大学の工学部に入学されるわけですが、なぜ法政を選びましたか。

岡島 高校時代の化学の先生に「あそこにはい

い先生がいるよ」、「受けてみたら」と言われたので、受けました。

根崎 大学はたくさん選択肢があったと思いますが、先生の勧めで法政を受けたということですね。

岡島 明治も受けて、確か明治も受かっていたと思いますが、あとは覚えていません。

根崎 なぜ法政の工学部を勧められたと思いますか。

岡島 それはよくわかりません。その先生は秋田大学出身だったと思います。法政に友達がいたと思いますが、わかりませんね。

根崎 秋田大学出身の先生で法政大学の工学部を勧めるというのも、またすごいですよね。

岡島 だから、何か関係があったと思います。優秀な先生がいるって、勧められればその気になってしまいますよね。

根崎 そうですね。

岡島 「君だったら受かるだろう」と言われたので、「じゃあ、受けてみようか」と思って受けました。

根崎 当時は、まだそんなに高校から大学に行く時代ではなかったですよ。

岡島 あの時は、進学率30%以下で、それほどいませんでした。あれが人生の分かれ目でした。

2. 学生・院生のころ

根崎 工学部で、麻布時代ですよ。

岡島 そうです。

根崎 麻布時代の雰囲気というのは、今の我々からするとなかなか想像できません。

岡島 市ヶ谷が立派になりましたからね。

北口 麻布は今一等地ですから、あのまま麻布

にあればよかったのにも思います。

岡島 一等地ですよ。あのままいれば大したものでしたね。

北口 けれども、麻布の校舎が古かったと。

岡島 校舎が古くてもあの頃の学生はみんな真面目で、一所懸命に勉強しました。機械工学科の先生は、東大の航空学科の教員の集まりでした。能谷（俊雄）、小井土（正六）、飯沼（一男）、村上（勇次郎）、全部東大系でした。おそらく航空学科だから、他に職がないからでしょう。

北口 戦争が終わって、行くところがなくなってしまったからでしょうか。

岡島 ですから、みんな優秀で学会でもトップクラスでやっていました。

根崎 入学した後の雰囲気はご自分でも納得できるものでしたか。

岡島 もうひとつは、授業料が非常に安いという、他の大学の半分以下だったと思います。

根崎 私もそう思います。私の時代もそうでした。

岡島 本当かなと思ってしまうくらい安かったです。後で聞いたら、先生方は、「我々の給料、安かったんだよ」と言っていました。

北口 東京ではどこに住んでいましたか。

岡島 初めに来た時は、横浜に親戚がいたので、そこにしばらくいて、そこから今度は東横線の学芸大学のところに移ったと思います。

北口 下宿しましたか。

岡島 全部、下宿でした。

北口 そこから麻布に通っていたんですね。

岡島 そうです。初めは父の弟が住んでいた横浜の鶴見で下宿しました。

北口 それなら、お父様も安心でしたね。

岡島 親戚というのはあまりよくないですね

(笑)。気を使って大変でした。

根崎 大学4年間は、親戚のところで下宿しましたか？

岡島 いやいや、2年間は親戚で、それから学芸大学のところの下宿して、ずっといました。学芸大学のところは長かったです。

根崎 大学院に入ってから？

岡島 工学部が麻布から東小金井に移転したのが1964（昭和39）年で、その翌年に大学院（修士課程）ができました。よく覚えていませんが、大学を卒業した時は、1人に10社ぐらい求人が来ていて、就職がとてもよかったんです。

根崎 ちょうど高度経済成長期ですよ。

岡島 確か、就職も決まっていたと思います。それで、就職しようと思っていたら、突然漆原（信之）先生に、「君、卒業しちゃ駄目だ。大学に残れ。私のところへ来て手伝え」と言われて、驚きました。そこで、「そういうわけにはいかない。内定もとってあるし決まっている」という話をしたら、「それでもいい。そんなところはやめちゃえ」と言われました。その内、「もう理事会の了承をとってある」と、そこまで言われてしまいました。理事会が何か知りませんでした。それで、「じゃあ、1年ぐらい残るか」と思って、会社に聞いたら「1年ぐらい待ってあげる」と言われて、大学に残ることになりました。

あの時は確か身分は実験助手で、製図とかいろいろな実験とかをさせられたと思います。それで、1年目にやめようと思ったら「駄目だ、辞めさせられない」と言われました。あの時、どうして辞めなかったのかよくわかりませんが、そうしたら飯沼先生から、「大学院ができたから大学院に入れ、私のところへ来い」

と言われました。うちは水産会社をやっていたわりと裕福だったので、大学院に進学しました。修士2年が終わった時、飯沼先生が学会とか何かで発表させてくれました。

当時、東京大学工学部航空学科に熊谷清一郎教授という超有名な先生がいました。熊谷先生は、怖い先生でしたが、優秀でした。日本で初めて、燃焼の研究でノーベル賞に相当するような世界的なゴールドメダルをもらっていました。飯沼先生から、「その先生のもとに行け」と言われました。熊谷先生は宇宙関係の研究をやっていました。今、H3 ロケットが失敗しましたが、あの一連の関係、燃焼関係です。それで、私もまだ若かったし、食べることに困らなかったの、あまり将来を考えず行くことにしました。それで、東大の航空学科に行った時には、試験が終わっても何もありませんでしたが、「じゃあ、研究生というシステムがあるから、私が推薦するから来い」と言われて、研究生として在籍することになりました。そして、実験や研究をやっているうちに、「学位（博士）を取れ」と言われて、学位を取りました。学位を取るの、けっこう難しかったです。ドイツ語と英語で試験をやって、それからほかにも、いろいろなことがありました。

北口 学位は東大で取りましたか。

岡島 東大で、無重力燃焼という分野で学位をとりました。「無重力」という言葉は我々が世界で一番早くつくった言葉です。

北口 我々というのは、熊谷先生と岡島先生たちということでよろしいですか。

岡島 そうですね。それで、「東大にはおまえのような馬鹿はいない」と言われて、「やれ」と言われたら、命を張って懸命に実験しました。

先生は、東大の者はわりと調子がよくて、努力と結果が割に合わなければやらないと言っていました。そして、「私はいい弟子を見つけた。君、指導教官が優秀になれる理由は、いい弟子をつかんだら離さないということだ」とも言っていましたね。しかし、熊谷先生が生活を保障してくれるわけではありません（笑）。

根崎 研究生ですからね。

岡島 研究だけやる流れになってしまいました。世界的な実験を多く行いました。

根崎 そこなんでしょうね。東大生と違って黙々と実験に励んでくれると。

岡島 それで、研究生で6年か7年ぐらいいました。研究生をやって5年過ぎたころに、学位を取ったら、法政から「来てくれ」と言われました。飯沼先生が来て「来てくれ」と言われたことを、熊谷先生に伝えたら、こっぴどく怒られました。「おまえ、法政大学があの時どうだったのか知っているか」なんて言われました。熊谷先生というのは、とてもストイックで厳しい先生で、研究以外には何も知らないと言っても過言ではありません。それで、最初は飯沼先生も諦めたと思います。あの時、私の親は「好きなことをやれ」と言ってどんどんお金を送ってくれて、わりと恵まれていたので、生活はあまり困っていませんでした。2年ぐらいたってから、法政大学から「ぜひ来てくれ」と誘いがあり、再度、飯沼先生が来て、長く粘って頼んだそうです。そうしたら、熊谷先生も、「しょうがない。じゃあ、やるか」ということで、法政に行くことになりました。

3. 法政大学の教員に就任

根崎 当時、工学部の先生方はほとんど東大出

身でしたか？

岡島 機械工学科はね。

根崎 法政全体的にそういう傾向がずっとあるじゃないですか。

岡島 いや、そんなことはないですよ。

根崎 そうですか。私の頃はもう、「東大の植民地」とよく言われました（笑）。

岡島 有名な先生は全部、東大出でした。確かに、東大の植民地のほうが大学としてはよかったかもしれません。

根崎 それはそうかもしれません。

岡島 東京大学から法政大学に来たらわりと力を持ってました。どういうわけか知りませんが、私が言ったらほとんどみんな他の先生方も聞いてくれました。

根崎 東大の大先生の下についていたということもあるでしょうしね。

岡島 そうです。みんな言うことを聞くので、人事はほとんど推薦すると通りました。そこで、法政出の人を4、5人採りましたが、あれは失敗でしたね（笑）。今はとても反省しています。

根崎 「成功だ」と言っていただけののかと思いました。

岡島 東大の友達に、「君、法政大学で東大からも採ってくれないか」と言われた時に、「わかりました。採りましょう」といって採用しておけばよかったのですが、やはり法政出の人が可愛くて、採用しました。

根崎 大学の教員の人事は、東大系の人が、後輩を東大から連れて来るというパターンかと思っていました。

岡島 私は、それをやめました。やめたというか、たくさんそう言われましたが、指導していて、法政出身の人が可愛かったんです。その点

において、やはり私は駄目だったと思います。薄情になって、組織を考えてやればよかったと思いますが、どう悩んでみても仕方がないから、それは言うだけです。だから、人事というのは難しいです。

根崎 今はもう、全て公募ですからね。

岡島 公募というのも、いい加減なところもありますよね。

根崎 そうとも言えなくもないですが、今は誰かが連れて来るなんていうことはまずありませんが、法学部はありますか。

明田川 否定も肯定もしません。

岡島 外部からみて法学部はわりといい人事をすると思います。法学部は、やはり法政大学の長で、高いレベルを保っているというのは、やっぱり人事ですね。法学部という、一目置きますね。

根崎 東大の研究生から工学部の教員になるわけですが、熊谷先生からの推薦があつて法政に来たという経緯でよろしいでしょうか。

岡島 飯沼先生の推薦で、東京大学の熊谷先生のもとで宇宙関係の研究をしないかと誘いがありました。

北口 それで研究をしていたところ、法政大学から就職の誘いがあつて、熊谷先生は強く難色を示しましたが、法政大学に恩もあつて、いらっしやった。

根崎 流れ的にはこれでよろしいでしょうか。

岡島 はい。熊谷先生は口が悪くて、あの先生は法政大学を認めていませんでした。でも、熊谷先生とか小井土先生のことよく話していました。

北口 元同僚ですよ。

岡島 熊谷先生は、人間的には立派な人で、昔、

短大の学部長をずっとやっていました。そして、非常に人格者でした。酒が好きで、ときどき付き合わされました。

根崎 法政から依頼が来た際には、「もう法政でいいかな」という感じですか。

岡島 みんな、僕を法政の人だと思っていたから、他の大学からという記憶はありませんでしたね。

根崎 母校に帰るとい形ですね。

岡島 あの時は、「教員一流、学生三流」と言われました。しかし、あれは嘘だとつくづく思いました。法政に来たら、「学生一流」で「教員三流」だと思いました（笑）。要するに大学は先端的でユニークで存在感のある大学にしようというのが必要で、いつも三流で満足しているようでは情けないと思います。そして、ハングリー精神を持たないといけません。今、法政大学は比較的待遇が良いのではないのでしょうか。教員が勉強しないと学生も勉強しません。ですから、大学がよくなるのは教員に依存しますよ。

根崎 耳が痛い話です（笑）。

岡島 あまりそういうことを言うともずいと思えますが、そう思いました。

根崎 学生の時と、教員になってからは、法政に対するイメージは変わりましたか。教員になった時に法政のイメージというのは、「こんな感じかな」という感じですか。

岡島 法政のイメージを描いたことがありませんでした。

北口 院生時代はともかく、法政に戻って来た時は小金井なので、麻布の学生の頃とは全く違いますよね。

岡島 小金井に戻って来た時、「なんでこの

先生方は毎日大学に来ないんだろう」と思いました。

北口 先生たち、大学に来ていませんでしたか。

岡島 そう思いました。実験・研究をやっている教授はそんなに多くなかったと記憶しています。

根崎 理系というと毎日研究室に来て、実験するのかと思っていました。

岡島 小金井に来た時は7年くらい過ぎていたので、機械工学科の先生は年配の方で占められていました。実験をしていた先生がいたかもしれませんが、あまり記憶はありません。

根崎 東大を定年退職した後、私立に移るパターンの先生が多かったのでしょうか。

岡島 多かったです。ですから、もう高齢で、あまり実験・研究をやっていなかったと思います。法政で2、3人採りましたが、定常化というほど、多くはありませんでした。「先生、法政に来ませんか」というと、みんな「OK」って言うんです。やはり都心にあるということがよかったですね。

根崎 工学部の教員になって、教授会のメンバーと違和感はなく溶けこめましたか。

岡島 向こうには違和感があったかもしれませんが（笑）、私にはなかったです。

根崎 では、そんなにやりづらく、居づらくはなかったですか？

岡島 ぜんぜん居づらくなかった。

根崎 良かったですか。

岡島 人間関係について考えたことはありませんでした。

4. 研究に集中

岡島 レベルの高い、いい研究をしたい、研究

でトップにいきたいということ、つまり、研究で頭がいっぱいでした。

根崎 教員の中にだって頑張って研究している人もいますよね。

岡島 平均的にいえばみんな上でしたが、東大の研究生の時に比べると物足りなく感じました。

根崎 研究生の時は、将来がかかっていますからね。

岡島 将来がかかっているというか、この研究は絶対にやらなければならないという気持ちでした。今やっている無重力状態の研究のほとんど、我々は全部やりました。どうして今の人は昔の論文を読まないのかと思いますね。国際会議でずいぶん発表しました。NASAにも行ったし、NASAからもうちに来て研究したいという研究者がいましたが、法政大学には呼ばませんでした。

根崎 無重力でも、なにか動いていそうな感じもしないでもない。

岡島 無重力で止めるというのは非常に難しいです。ピタッと止めて、それで実験をやらないと駄目なものがあったので、それをやるのに3年程度かかりました。朝昼晩と実験しました。

北口 実験をする道具や機械は、小金井にありましたか。

岡島 それは全部、研究生の時に東大でやりましたが、小金井でも協力してもらいました。小金井での実験はその応用でいろいろなことをやりました。

根崎 工学部に先生はいて、それぞれの研究テーマをやらうと思ってても機材関係はあまり法政には揃っていなかったということですか。

岡島 あの時、通産省や石川島播磨重工業とか

が研究費をくれていたので、私は、機材や研究費に苦労したことはありません。

根崎 それは先生によりますよね。

岡島 法政大学は、研究費はあまりくれなかったもので、みんな「お金がない、お金がない」と嘆いていました。

根崎 大学は研究費用をそうくれませんからね。

岡島 国のプロジェクトで北海道の上砂川にある世界最大の無重力環境設備で実験をしたときは、1回落とすと額面200万円かかっていたと思います。それをだいたい1年間に50回ぐらい落としていたので、億という金がかかっていました。それで、4、5人の学生を上砂川に連れて行きましたが、学生がとても喜んでいました。朝6時頃に起きて、実験室に行きましたが、よくやってくれました。あれは法政の学生でなければ駄目だと思いました。本当に偉い。宝ですよ。

根崎 そう考えると、工学部の施設はいろいろ課題があったでしょうね。

岡島 工学部の施設は、貧弱だったと思います。

根崎 小金井に移って来てからも、まだ貧弱でしたか。

岡島 財政的にそれほど裕福ではなかったと思います。

根崎 法政はもともと文系の大学だから、理系のことをよくわかってないということもありますよね。

岡島 そうですね。

根崎 ただ、岡島先生としては、他で研究費用を獲得していて、機材関係も東大で利用していたということで、それほど不都合は個人的には感じてはいらっしやらなかったということですか。

ね。

岡島 自分で言うのも変ですが、資金面で不自由したという記憶はありません。ただし、国や企業から研究費が出るのが、わりと遅く、研究費を大学にくれる時のやり方に非常に問題がありました。要するに受託研究で大学にお願いすることになると、痛いことに、大学に1割、2割ぐらい取られてしまいます。

根崎 今もそうですね。

岡島 それで、企業は考えたと思います。受託研究として、研究費を500万円渡すと大学に100万円程度取られてしまうので、ある企業は、私に寄附してくれました。寄附金でくれると大学が規定上取れないので、500万円ぐらいになると、みんな寄附してくれました。

北口 それだけ先生の研究が魅力的だったんでしょうね。

岡島 魅力的というか、企業も必要だったのでしょう。

根崎 企業側としても、寄附のほうが良いということでしょう。

岡島 確かに、みんな寄附してくれましたが、それが、理事をやっている時と重なってしまうこともありました。ですから、時々、理事会のないときに、北海道の上砂川まで行っていました。

根崎 大学の名目としては事務費用ですけどね。

岡島 大学が取るのは当たり前ですよ。光熱費や空間など使いますしね。

5. 学生運動

根崎 当時、教員の立場として、学生の雰囲気はいかがでしたか。

岡島 やはり学生は正直で、勉強している先生にはついていきます。うちの学生は本当に素直です。勉強好きな人は本当に勉強するし、しない人は初めからしませんが、どちらかという先生態度によりますね。いろいろな学生がいましたが、学生には満足しています。

北口 学生運動が激しい時代でしたよね。

岡島 そうでしたね。

北口 小金井はどうでしたか。

岡島 小金井の学生運動については、あまり記憶にありません。理事をやって初めてわかりましたが、どちらかという、小金井はアマチュア的で、市ヶ谷の学生運動は、プロ的で大変でした。

北口 小金井の学生運動は、違いましたか。

岡島 違ったというか、あれは市ヶ谷の先生方の問題もあると思います。学生への対応について意見して、一教（第一教養部）の先生から怒られたことがあります。要するに、私は、「全部教員が出て学生に対応すべき」と。つまり、向こうがやったら、こちらも構えろと言いました。そうしたら、「そんなことをしたらどうなるかわかりますか」と言われました。ですが、自分の大学を自分で守らないで、どうするのでしょうか。

根崎 私は、先生が教員になられた時に入学しました。私は市ヶ谷ですが、大変でした。「大学って怖いんだな」と思って、命懸けでした。

北口 では、工学部の中ではあまり学生運動というのは……。

岡島 工学部にもいましたが、市ヶ谷と比べれば可愛いものでした。私のゼミ生にもいましたね。「採ってください」って来るんです。「なんで？」と言ったら、「行くところがない」って

言って。真面目で、ちゃんと宿題も全部やってくるので、「君、学生運動をやっている暇があったのか」と聞くと、「大丈夫です。あれは趣味ですから。ストレス解消ですから」と言っていました。ですから、工学部は市ケ谷とはレベルが全く違っていました。しかし、大学が自治会費の代理徴収をやめたのは非常にいいことだと思います。

根崎 そうですね。みんな結果的にやめましたけどね。多摩に移転してからも、最初はやっていました。でも、市ケ谷は紛争を起こしている学生たちから殴られ、授業を妨害され、本当に命の危機に晒されている先生方もいました。また、ロックアウトがあって、お立ち台に立たされて5～6時間もつるし上げされている先生方もいました。当時、中村（哲）総長でしたが、見ていて「総長って大変だな」と思いました。車から出られないんです。「出て来い」ってやられて、出て行けないじゃないですか。団交の時に一回だけ見に行ったら、中村総長が会見している時に石つぶてなどを投げるんです。そういう時がありましたね。ですから、あの時代は酷かったと思います。工学部では、そんなに授業を妨害されることはありませんでしたか。

岡島 学生運動の時は、厳しく対応すればいいんです。大学の中でグジャグジャやるのが駄目だと思います。

根崎 だけど先生、命が懸かってきますよ。

岡島 必ず裏取り引きがあります。

根崎 私が学生の時に、市ケ谷では、1000人ぐらいが竹槍訓練をやっていました。

岡島 けれども、殺された人はいないでしょ。

根崎 いや、います。六角校舎だってありましたから。

岡島 昔ね。あの時ね。

明田川 家を燃やされた先生とかいらっしやいましたよね。

根崎 爆弾を仕掛けられた人も何人かいますから、市ケ谷の先生、大変ですよ。

北口 一方で、工学部は、地理的にも離れているし。

岡島 工学部の場合はただ騒ぐだけで、どうってことなかったです。

根崎 工学部は場所的な問題とかいろいろあって、おそらく市ケ谷ほどではなかったと思います。

岡島 学生運動は、自分たちの力では負えないと思ったら、第三者の組織に頼むことですね。

6. 教学改革と多摩移転問題

根崎 教員生活をされている中でいろんなことがあるわけですが、工学部の場合には、ひとつは多摩移転の問題があがってきますよね。この時に、『法政大学と戦後五〇年』などにもいろいろな意見が工学部の中にもあったとあります。つまり、賛成派・反対派がいたということですが、その雰囲気というのは先生ご記憶でしょうか。

岡島 今回のヒアリングのメモを読んで、初めて知ることがたくさん書かれていて、不思議に思いました。多摩移転について、工学部は議論しましたが、それほど意見はなかったと思います。

根崎 議論されていませんでしたか？

岡島 教学改革に対してはいろいろな議論をしました。要するに多摩移転の議論というのは、ある一部ではやっていたかもしれませんが、公にはありませんでした。工学部の教授会で決めた

ことはありません。ですから、とても多摩移転などは不思議に思います。

根崎 我々が見ているものでは、教授会で学部長から提案されて、それに対する批判があったということが書かれています（『法政大学と戦後五〇年』、558-561頁）、先生としては「そんな喧々諤々やったかな」という感じでしょうか。

岡島 そうでしたら、小金井キャンパスの再開発があのようにならないでしょう。全く抵抗や反対がなかったと思います。教学改革で多摩移転なんて……。文化勲章をもらった、尊敬する井口（洋夫）さんという化学の先生に相談したこともありました。相談した時に、先生から「君ね、移転はマムシの出るところに行っちゃ駄目だ」と言われました。それで、聞いたら、あそこはマムシだらけだって（笑）。

根崎 それはそうでしょう。

岡島 それで決断したわけではありませんが、多摩移転をしなければ何もできないという議論はありませんでした。事務のほうから「教授会で決めたんですか」という話をよく聞いて、驚くことはありました。そういうグループがあったみたいです。

根崎 そうなのかもしれませんね。

岡島 ですから、別のグループが私を理事にしました。

根崎 それぞれの学部の中には、おそらくいろいろ事情があるので、工学部はどうかかと思っていました。

北口 岩下（秀男）学部長がけっこう多摩移転に乗り気だったという話もあります。

岡島 岩下先生の議論は、取るに足らないと考えていました。

根崎 当時ひとつよく言われているのは、小金井キャンパスが狭いということですね。

岡島 ですが、城山に行くと、さらに狭いです。

根崎 結果的に、1年生だけ多摩移転するということになるわけですね。

岡島 あれは文部省との相談で、「1年生だけの多摩移転で工学部の問題は解決する」ということでした。

北口 そうしたら大学院が拡充できるということですね。

岡島 そうです。

北口 あの時、多摩に1年間だけ行っていた学生は大変だったらしいです。

岡島 そうだと思いますが、大学院の定員増や学科再編、教学改革などを全部考えれば、週に1回なので勘弁してもらわないとなりませんでした。やはり、設置基準を満たさないと話になりませんからね。

根崎 移転は考えていましたが、交通問題は考えていなかったんでしょうね。

岡島 何も考えていなかったです。ただ増えて設計して、建物が建つというだけの話でした。それでは、教学改革ではないでしょう。だから、工学部も教学改革でいろいろ議論したと思いますが、その中に「こういう学科をつくろう」、「ああいう学科をつくろう」という話は一切なかったと思います。

工学部を「理工学部」にしようとした時は、できなかったのは法政だけではありません。あの時、文部省は社会的にもとても大きな力を持っていました。ところが、法政大学はその時、一教問題で文部省を怒らせてしまっていました。それを知らない私が火の中に突っ込んだものですから、やられてしまいました。最終的に

文部省は、工学部の学科再編成に反対しました。

たとえば最後に説明し、承認する時に東京の他の大学の学長も呼ばれましたが、その会議の時に文部省は「法政は寄附行為に違反している。だから認められない」と言い出しました。そうしたら、中央大学の学長が「文部省は何を言っているんだ」って怒りました。当時の法政大学の寄附行為は、「評議員を29人とする」と書いてあったと思います。1週間か2週間前に一人お亡くなりになったので、一人足りませんでした。それを文部省は、寄附行為違反だと言って、反対しました。それで、すぐ理事会でそういう事情を言って、寄附行為を変えました。今は、「何人以下」となっていますよね。あれ、当時は「以下」ではありませんでした。29人なら「29人とする」と書いてあったので、一人亡くなると、寄附行為違反になって、それを文部省に密告する人がいました。あの時、我々も驚きましたが、中央大学の学長も他の大学も、文部省に怒って、「法政の言う通りだ」と言ってくれました。

根崎 当時、法政大学としては、市ヶ谷の新学部設置でかなり文部省を怒らせていました。学部の中でさえまとまっていないのに、話を持って行って「まとめてから持って来い」と言われたようです。

岡島 「工学部もそうか」って聞かれて、「工学部はまとまっています」と何回も言いました。「工学部も大丈夫か」と言われた時に、事務のほうは「大丈夫か、大丈夫か」って言っていますが、「まとまっている、まとまっている」と言い返しました。

根崎 事務はそうですよ。市ヶ谷の状況を見ると、学部がまとまっているのかなと思って

しまいます。

北口 あの当時、小金井は工学部ひとつだけだから、まとまりやすかったかもしれないですね。

根崎 予算関係も工学部だけの予算ですから、やはり市ヶ谷全体の予算とはかなり違いますね。その後、多摩に移転した学部から「うちも学部単独予算でくれ」という話が出てきます。

北口 やはり「理工学部」にしたかったのでしょうか。

岡島 したかったです。けれども、あの時はまだマル合教員の審査でしたので、全く人数が足りませんでした。鬼塚（豊吉）先生は「教員不足分もいれて18人ぐらい採ってもいい」と言ってくれましたが、18人は大変なことです。

根崎 それは大変です。

岡島 18人、今度はそれに伴う教員の整理やマル合教員の選定、あるいは教員の身分変更を考えなければなりません。そこで断念して、学科再編成ということでお茶を濁しました。工学部には絶対に言うわけにいきませんでした。今、考えるとやっぱり工学部の教員組織の体たらくが最大の原因でした。でも教員の不足分は助手の専任講師昇格人事で切り抜けました。

根崎 新学部設置の時は、やはりマル合教員の数の問題は大きいです。

岡島 大きいですね。我々の時も、いろいろな大学が全部出しましたが、マル合教員で引っ込みました。某大学も頑張っていましたね。3人か4人が怒られて、風呂敷を持って帰る姿が惨めに見えました。我々もそうだったのかもしれませんが。けれども、文部省はいろいろなことをやりましたが、それに対して社会が反応しました。「文部省、けしからん。大学に干渉して

いる」ということになって、社会的に文部省がとて批判されました。それで変わって、今は、大学が申請すれば厳しい審査もなく認可されるようになりました。だから工学部が理工学部容易に認可されました。

北口 あの当時は、いろいろな大学が工学部を「理工学部」にしたいというのを計画していたということですか。

岡島 そうでしたが、全て通りませんでした。

根崎 法政だけではなかったということですか。

岡島 うちだけではありませんでした。法政は最初の折衝で駄目だったので、申請もできませんでした。

根崎 受け付けてもらえない？

岡島 受け付けてもらえないというよりは、そんな冒険ができなかったと学務担当理事が言っていたと聞きました。18人入れ代わるのならいいですが、若い先生だってマル合ではない人がたくさんいましたしね。

根崎 理系は、ほとんど博士号を持っていると思っていました。

岡島 持っていますよ。ただ、理系の博士号は文系とはえらく違うものです。持っていることが前提の話ではありますが、今は博士号よりも別に、やはりレベルの高い実績をもっていなければ話になりません。

7. 常務理事時代

根崎 常務理事に就任される時に関してお話を伺いますが、工学部としてはどういう経緯で先生が立候補されることになりましたか。

岡島 最初は、理事になるということは知りませんでした。6学科揃って、工学部で会議を開

いた時に、理事推薦者を決めようという話になって、機械からは、宮川（行雄）先生が出ましたが「岡島しかいない、岡島しかいない」と強く主張したそうです。5人は「駄目だ、駄目だ」と言っていたらしいのですが、ほかに人がいなかったの、通ったそうです。「推薦されましたよ」と聞いて、驚きました。当時は、宇宙開発の研究で研究費がたくさん国から出ているし、「困る」と何回も言いましたが、「いや、工学部のためにやってくれ」という声が多くありました。

根崎 40代で理事になった方は、ほかにいませんよね。

岡島 増島（宏）先生が、「私も若かったけど、君のほうがもっと若かった」って言っていました。

根崎 今だって、おそらく40代はいないでしょう。

岡島 49歳だったかな。50歳になっていなかったと思います。

根崎 それで理事選挙に出られて、工学部は伝統的に理事の枠はありましたか。

岡島 理事の枠があって、文系の人も票を入れるので、票が1番で、驚きました。

根崎 当選されたわけですね。

岡島 そうですね。当選した時に、辞めるとは言えないでしょう。

根崎 それは言えないでしょうね。

北口 工学部の全てが先生の双肩にかかっているわけですね。

岡島 そうですね。けれども、私の考え方はみんな知っているからね。「あの人はもう多摩には行かない。ここでちゃんとやるぞ」という立場であることは認識していたと思います。小金

井を再開発しようと。1年生を多摩へやるのは、設置基準を満たすためには仕方がない。それで、そうになりました。何しろ実験のほうで頭がいっぱい、理事になるとあんなに時間が制限されるとは思いませんでした。

根崎 そうだと思います。

岡島 学内理事は、職員が1人、教員が4人、合わせて5人しかいません。総長を入れて6人ですね。当時、田村（善重）さんという職員の方がいて、いろいろな相談をしました。ですから、理事をやっている時はみんな相談して決めたようなものです。

北口 先生が常務理事をなさった時は、阿利（莫二）先生が総長で、鬼塚先生、山本弘文先生と3人が理事でしたね。

岡島 3人で、ほとんど決めていました。

根崎 ものすごい顔ぶれですね。

岡島 多摩担当は、山本弘文先生はやりませんでした。私が多摩担当で、多摩で変なことを言うから、顔をしかめていましたね。

根崎 分担はどうやって決めましたか。

岡島 総長の任命で決めました。

根崎 総長が決めるんですか。

岡島 そうですね。岡島だったら、あまり揉めないところを担当にさせよう。だから私、担当が多かったでしょ。附属高校が全部担当で、一高、二高、それから女子高。

根崎 確かに、国際交流も担当ですし、いろいろ担当されていますよね。

岡島 国際交流は得意でしたね。国際交流だけでもよかったような感じですが、保健体育も、図書館もやりました。計算センターもやったと思います。

根崎 計算センターもやっていますね。

岡島 それに加えて、工学部も担当でした。工学部がいちばんやりたくなかったです（笑）。

根崎 確かに広いですね。

明田川 附属高の話が出ましたが、90年代頃から附属高と大学の高大連携が盛んになりますが、そのことについて何かありますか。

岡島 あの時は、3校長と我々と1週間に1回程度、附属担当会議をやっていました。頻繁に呼ばれて附属高校には行きました。

根崎 最初の常務理事の時には中高担当ではなく、2期目再選の時からですね。

岡島 いいえ、最初からだだと思います。

根崎 最初の時の担当には入っていないです。国際交流、保健体育、多摩総務部、多摩学務部、多摩学生部、工学部事務、計算センターの担当ですね。

岡島 附属は最初からだと思いますが、僕の記憶違いでしょうか。

北口 途中で変わる可能性もありますよね。

根崎 それもありますよね。

北口 記録によると、1期目は比較的、多摩に集中している担当のようですね。

8. 「理工学部」への改組を断念

根崎 この時期に先生にぜひお伺いしたいと思っているのが、工学部が先ほども話に出た「理工学部」へ改組することについてです。文部省への折衝もかなり大変な時だったろうと思います。結果的には、先ほど言ったように学内的にもたぶん法政が文部省から嫌われているから、なかなかこういう問題がうまくいかなかったのかなとも思いましたが、いかがでしょうか。

岡島 市ヶ谷が嫌われているということは、噂では聞いていましたが、傍目ではわかりません

でした。それに関係なく交渉していたので、事務のほうは真っ青な顔をしていました。どうして青い顔しているのかわかりませんでした。後から聞いてみたらやはり大変だったということでした。ただ、やはり工学部の責任です。我々が事務と一緒に行って判断しましたが、明らかに「わかるでしょう」。

根崎 その「わかるでしょう」というところを、ご説明いただけますか。

岡島 あの時は学務担当が鬼塚先生だから、「先生、こうなってます」って言いました。「じゃあ、マル合教員と補充人事を合わせて18人採ればいいじゃないか」言われましたが、採るのは良くても、今度は不要な教員の整理等の問題もどうしても生じます。教学改革を進める上で、教員組織等に混乱を生じさせることは絶対に避けなければなりません。それで、いろいろあつて文部省の指導や干渉があれだけ社会的に批判されるとは思いませんでした。うちだけではなく、どの大学もみんなやられました。

根崎 工学部が「理工学部」じゃないですか。「理学部」と「工学部」という形に分けるとするのは？

岡島 それも考えました。本来ならば理学部をつくりたかったんです。けれども、この規模で理学部というのは無理です。理学部というのは、数学や物理とか化学が中心ですよ。理学部を持てる大学としては、やっぱり早稲田大学とか慶應義塾大学ぐらいの規模でないと財政的にも無理だと思います。法政大学の理学部は、荷物になるだけだと思います。それなら、今流行の「理工学部」の方向性で進めたほうがいい、まだ学生が集まるだろうと考えました。

根崎 私は理学部・工学部という正論でいくと

思いました。

岡島 我々も、理学部をつくりたかったら理学部にします。けれども、法政大学に理学部をつくったところで、学生が来るかは疑問です。

根崎 そういう問題もありますね。

岡島 私としてはそう思いました。理事経験者の稲田（太郎）さんとも「理工学部」について相当論議しましたが、やはり結論は一致しました。

根崎 一応、工学部全体として理工で行こうということになったんですね。

岡島 理学部は無理ですね。

根崎 けれども、理事としての役割上、文部省に行つて交渉しなければいけないと。

岡島 一回は打診しましたよ。その時、向こうからは、「それだけの力がありますかね。ハハハハ」なんて言われました（笑）。

明田川 最初に文部省に行つて駄目だなという雰囲気の後、学部内でやっぱり「理工学部」で行く派と、工学部のまま学科再編派と、なかなか意見がまとまらなかったというようなことはありましたか。

岡島 当時、そういった考えはありませんでしたし、そこまでも行っていませんでした。もう自分たちの学科が再編できればいいと思っていました。要するに、工学部の中にけっこう矛盾がありました。例えば、機械工学科の中に化学があつて、その化学の先生が学科の3分の1ぐらいを占めていました。それを全部、きれいに整理したほうが、入るほうもわかりやすいし良いんじゃないか。そういうことがあつて、学科再編でまず進めて、それから「理工学部」だという話になりました。

根崎 常務理事になられていろんな担当がある

わけですけれども、当時を思い出されて、一番これは大変だったと思うことはありますか。

岡島 全部きつかったですね。

根崎 それはきついと思います。ちょうど先生が常務理事になられたのは1990（平成2）年ですが、その次の年には工学部から「理工学部」への文部省の折衝が始まって来る時で、歴史上は大変な時期だなと思っていましたが、「そんなに採めてもないよ」ともおっしゃられていましたね。

岡島 「理工学部」の改組は、もうやればできるとわかりましたし、文部省はもう中までは関与しないということですから、教授会と理事会にお任せする、それが筋じゃないかということになりました。私見ですが、文部省は間違ったと思います。やはり日本では、干渉すべきです。やはり別の目で見ないと、日本の大学は駄目になります。けっこういい加減です（笑）、自分で言うのも変ですが、アメリカと比べるとやはり教員に対しては甘いです。我々の時代は良いやつと悪いやつがはっきりしていましたが、今はどうなっているのでしょうか。もう半世紀にもなるからわからないですね。

北口 教員のレベルということですか。

岡島 少々厳しいかもしれませんが、本学の教員のレベルはそれほど上がっていないと思います。話は変わりますが、現在、会社の依頼で、いろいろな仕事をさせられています、論文を書いて学会に出すと、いい文章が盗まれることがあります。「これ、どこかで読んだことあるな」と思ったら、同じ文章だったりして。滑稽ですね。

根崎 いわゆる剽窃ですね。ただ、今までになかったような研究って誰だって生み出したいで

すが、今の若い人たちを見ていると、隙間産業みたいなところがありますよね。隙間を狙うぐらいしかなく、大きなテーマって難しいですよ。

岡島 私はラッキーな時代に生きていたと思います。テーマがみんな大きかったです。宇宙産業で、国の中心だったということも影響しているのでしょうか。

根崎 今も会社で研究されていますよね。

岡島 今は、健康寿命の関係で血流を測っています。ある領域の遠赤外線（レゾナンス波長）を身体に当てると温熱効果で、血流が増します。いろいろな関係会社と協力して、血流がどれぐらい増すかを解析しています。それを今度、医学の学会で発表の予定です。

9. 小金井再開発へ

明田川 時間が前後して申し訳ないですが、1989（平成元）年12月に法政懇話会というのできて、そこに工学部からは稲田先生、岡島先生、白井（五郎）先生、大澤（泰明）先生の4人が参加されていますが、どのようなことがありましたか。

岡島 何の話でしょうか。初めて聞きました。

明田川 法政懇話会は、法政大学が抱えている問題をマクロな視点からいろいろ考える会ですが、何か思うところがあって参加されたのかなと思いました。

岡島 それは初耳です。

根崎 今までのお話にあった、工学部にもいろいろな問題があった時ですね。工学部の基本問題検討委員会が、その前の5月にできるということ。

明田川 その流れなののでしょうか。

岡島 そんなものが次から次へとできましたが、わけがわかりませんでした。

根崎 ちょうどその時に、多摩全面移転に関して議論している時なので、そのことが関わっていると思います。

岡島 稲田さんとか何かで、そんなことあったこともありません。話も、いま初めて聞きました。

北口 名前だけだったのでしょうか。

岡島 自分勝手にやっていたね。

根崎 理事に就任する2年前に、工学部の多摩校舎が出来上がり、多摩C地区と呼ばれていましたが、ここは先生も行かれましたか？

岡島 1年生の教育には行きました。あの時は、あるグループだけでは不公平だから、全員が行くようにしようということになりました。そうすると、多摩移転がいかに大変かわかります。ですから、経済学部と社会学部はこっちに来たいと思いますね。

北口 そうだと思います。

岡島 「我々は市ヶ谷に研究室を持ちたい」という話を頻繁に聞いていましたが、「駄目だ、決めたものは最後までやれ」と言いました。

根崎 『法政大学と戦後五〇年』には、工学部の中にも多摩の全面移転派の人達と、反対派の人達がいたということが記されていますが(558-561頁)、そのようなイメージはあまりありませんか。

岡島 移転派というのはみんな不純ですよ。

根崎 どういう部分で不純ですか？

岡島 本当に教学改革をきちんと考えて行きたいという議論は聞いたことがありません。ですから、そういった意見に耳を傾けたことはないし、真剣に考えたこともありません。

根崎 『法政大学と戦後五〇年』によると、河原(一郎)先生は小金井再開論、岩下学部長は多摩全面移転論を主張されていたようです。

岡島 それは全部、個人の意見です。もし教授会でそんなことを一緒に考えていたならば、あの再開の時に揉めていると思います。

根崎 確かに教授会ではなくて教授会懇談会の席上でそういう意見を誰か出していたようですね。

岡島 河原先生は、小金井を再開すべきだということも言っていました。

根崎 小金井を基盤にやっていくべきだということですか。

岡島 そうです。

根崎 やはりお聞きしてみないとわからないですね。

岡島 我々の感覚では、そんなことは見ていませんでした。本当に教授会で決めるならば、記名投票で投票をやってきちっと決めるならいいのですが、決めていないのにも関わらず「決まった。決まった」ということになっていました。何が決まったのか、決まったことさえわかりませんでした。要するに理事会がこう言えば工学部は従うだろうという想定を持っているので、理事会に情報をいっぱい流しちゃおうと。

北口 そっちが既成事実になっていくみたいなことですか。

岡島 そうですね。だから、岩下さんは私が選ばれるとは夢にも考えていなかったと思います。あれから何にもお咎めがなくなりました(笑)。

根崎 でも、これがあって先生の登場ですから。

岡島 いや、登場させられました。なかったらさせられてないです。研究をやって、もつとい

ろいろなことをやっていました。

それで学会で、国から研究費をもらう席が空くから、「岡島が理事になったから、あの席が空く、私が入ろう」という他大学の人がたくさんいました。要するに、席を空けたくありませんでしたが、やはり空けさせられました。ただ、また復帰しましたがね。

根崎 確かに、そういうところはありますね。

岡島 やっぱり研究費が絡むし、我々も真剣勝負ですから、それは厳しいです。理事なんていう話ではありません。

北口 研究者として、脂の乗った時期に大学の政治のほうに時間をとられてしまうみたいな感じでしたか。

岡島 あの時の田村さんという立派な職員理事の人の顔が、まだ忘れられません。「何回出ればいいんですか」と聞いた時、「何考えているんだ。法政大学の常務理事だぞ」って厳しく叱責されました。

根崎 先生は50歳手前で常務理事になって、学部の中ではみんなお年いった方がいっぱいいらっしゃいますね。

岡島 みんな私より年上でした。

根崎 どういった感じでしたか。

岡島 あまり他の先生から批判されたことはありません。

根崎 ある意味、他の年輩の先生方も、若い人でいってもらったほうが良いということだったのでしょか。あるいは、今まで政治に関わっていない人にいってもらったほうが良いとか。

岡島 おそらくこれで多摩移転はなくなっただろうという感じがしたと思います。移転だなんて、とんでもない話だって言っていましたから。

北口 工学部は、学部長をやった人が理事にな

るわけではないんですね。岡島先生、学部長を経験されていないですよ。

岡島 あれは断れるんです。

根崎 他の学部は、学部長をやって理事というイメージがあります。これは岡島先生だけではありませんか。

岡島 飯沼先生もやっていません。

北口 工学部は別に、学部長をやって理事というルートではないみたいですね。

根崎 他はほとんどそうですね。

岡島 理事をやったら、学部長はできません。いろいろな絡みがあると思いますが、全くそれを知らないから、パッとやって当たっていきました。それだけに、慎重に取り組んで、事務系に全部、問題点を聞きましたね。

北口 先生、先ほどから事務の方の名前が出ますね。

岡島 教員の名前は覚えてないけど、事務の方の名前は覚えています。やっぱり、彼らは苦労しているからいいことを言いますよね。

根崎 周りを知っていますしね。

岡島 そうですね。教員のように少し来てやるだけでなく、ずっとそれだけ仕事してきているわけですよ。

根崎 確かに事務は、優秀な人がたくさんいます。

10. 大学院の拡充と学科再編

根崎 2期目の理事時代に入りますが、岡島先生の関わりとしては大学院の定員増の関係でしょうか。

岡島 大学院はやらなければならないと思いました。

根崎 これで文部省に折衝していくという形に

なっていくわけですね。

岡島 それで大学の収入を健全にしなければなりませんでした。

根崎 それにしても、50名の定員だったものを300名に引き上げるというのは。

岡島 倍増だと思っていましたが、さらに多い人数でしたね。何しろあの時、前総長の青木宗也先生が来て「よくぞやった」と言ったぐらいです。法政の規模では300名は常識ですが、マル合教員が各学科4名か5名必要だったので、マル合をずいぶん採用しました。文部省の課長は大学関係者の前で、「何々先生、マル合。何々先生、不可」って読むんです。

北口 学部の拡充ももちろんですけど、大学院の拡充というのがやはり必要でしたか。

岡島 そうですね。学部だけやっても定員は増やせないんで、収入になりません。大学院は、50から300なので大きいですね。

北口 修士課程が50から300に。この時、南館もつくって、大学院の定員も増やしてというところですね。

根崎 工学部は理系ですから、学部から修士課程へかなりの人数が行きますよね。

岡島 かなり多いですよ。

根崎 ですから、そういう背景があると思います。

岡島 大学院は、わりと話がうまくいきました。やはり文部省も、学部と比べて、大学院は事務のレベルも高いと思います。

北口 文部省の中でも、学部担当と大学院担当では、全部違いますか。

岡島 全部違います。マル合審査の時は、いろいろな大学の先生に頼みに行きました。熊谷先生にお願いしたら、先生があちこちで先生を

やっているかつての弟子に連絡をとって来て、「今度、岡島が行くから、話を聞いてやってくれ」と話してくれました。熱心にやってくれましたね。

根崎 東大系は多いですからね。

北口 そこで生きてくるわけですね。

根崎 ですが、50を300に増やして、通るといのがすごいですよね。

岡島 確かに、あの時はlog(対数)スケールで資料を作りました。向こうも、初めから通すつもりだったみたいです。学科再編成から比べれば、資料も少ないし、わりと簡単でした。何しろ、学部は大変でした。

根崎 大学院はこういう状況でしたが、学部のほうは学科再編が続いていくわけですね。普通、学部で8つも学科があるというのは……。

岡島 少ないですよ。

根崎 市ヶ谷からすると、1つの学部が8学科なんてちょっと考えられません。文学部の5つとか6つぐらいの学科が、「多いな」と感じます。

岡島 たとえばインドには、Indian Institute of Science (IISc) という有名な大学院大学があります。そこに、客員教授として留学したこともあります。1学部で数十学科ありますよ。

根崎 日本でも、例えば東大なんかだとかなり細分化されていますか？

岡島 ああいうのは、まだ幼稚園です。もう本当に専門家をつくっていくということです。

北口 専攻という分かれ方ではなく、学科レベルでつくっていくということですね。

岡島 そうです。何しろ、人が多くて、教員と学生数が同じくらいいると思います。

根崎 そこは文系と全く違うでしょうね。

岡島 工学部のあの規模では、8学科の倍あってもいいと思います。ただ、倍あるほど日本は進歩していません。

北口 常に機械工学科は筆頭学科でしたので、やはり規模も人数も多いですか。

岡島 最初の学部長の加茂正雄先生が非常に有名な先生でしたから。機械は森田忠孝とかあのへんがずっと……。機械工学科で学部長をやった人というのは、あまりいないんじゃないでしょうか。個性が強いので受からないと思います。飯沼先生もやっていませんし、小井土先生はやったかわかりませんが。能谷先生は好きでした。だから、非常に人触りがいい人じゃなきゃなれないですね。

北口 小井土先生はやっていますね。

岡島 そうですか。小井土先生は、理事もやっています。けれども、小井土先生は工学部のためには何もしていないと思います。私も何もしなかったかもしれませんが、大学院はヒットだと思いますよ。

根崎 そうですね。これは工学部だけの問題じゃなくて、学内的にも大ヒットでしょうね。

岡島 それが、工学部は気がつかないんです。修士課程の定員が増えて、どれだけ大学に貢献するかということについて、財務を担当している人以外は、ピンと来ていませんでした。

根崎 ひとつ今、思ったのは、工場等制限法という法律があって、23区は定員増してはいけないという法律があります。

岡島 我々の時はありませんでした。

根崎 この時代あったと思いますが。

岡島 小金井だって東京都です。

根崎 いや、23区だけです。23区のところで、もう定員増なんて駄目と。

岡島 その噂は聞いたことがあります。もしかしたらギリギリのところかもしれませんね。

根崎 その後、解除されますが、新学部設置の1999（平成11）年段階にはまだあります。

北口 あの時は、「福祉」や「情報」が学部だったら可能という話でした。

岡島 大学院とかね。

根崎 定員増はとにかく駄目で、現状維持しかできませんでした。うちの人間環境学部ができる時も、他の学部から定員を分けてもらって、大学の定員を増やしてはいけませんでした。

岡島 うち間違っただけではないですよ（笑）。

根崎 小金井は23区を外れているので、まだ増やせたと思います。この問題、大学にとって大きなことです。

岡島 あの時は何の問題もなく、スムーズに通りました。あの時、定員増に文句を言われたら。けれども、300も出したような気も……。あまり大きすぎて。青木宗也先生が来たことは覚えています。

北口 300という数字は間違いありません。

根崎 大学の歴史ではそうなっているので、間違いありません。

岡島 もしかしたらそうかもしれないですが、学部と大学院で分野を間違っただけではないよね。

根崎 学部と大学院で、バーターができるかというのは少し疑問に思います。

岡島 文部省はそんなことしませんね。

根崎 ただ、文部省に認められています。

岡島 もしかしたら、23区から外れているからか。

根崎 それはあります。工場等制限法は23区

に限定されていますから。だから、あの時、増やすことができないので、市ヶ谷の新学部は悩みました。

岡島 現在はこうだから、このまま増えていくようになりますという、増える見込みのグラフをlogスケールで書いた覚えがあります。大学院はよかったなという感じですね。

根崎 大学としては大変ありがたい話で、それは総長だって喜ぶますよね。

岡島 けれども、工学部は何の反応もありませんでした。わからなかったんじゃないですかね。

根崎 当事者でないと、法律なんてわからないと思います。23区の大学は、どこの大学も定員を増やせないという問題がある中で、新学部をつくるので、よその学部から枠をもらって数合わせしないとイケませんでした。

岡島 それをやったら大変だね。

根崎 大変です。もらったら恩義があるわけですから、今度はお返ししなければいけないということもあるので、大変です。

11. 国際交流

根崎 それから、この時代、国際交流が盛んになってきて、下森（定）総長とよく外国に行かれています。二人で行くというのは、なかなかありませんよね。

岡島 知りませんでした。いつも一人で行っていて、あのあたりをよく知っていたことに加えて、総長というのは、自分の中ではそれほど大きな存在ではありませんでした。常務理事会でも承認されていたことでしたしね。

根崎 先生たちは研究の出張みたいな感じでいたんじゃないですか。

岡島 あの時、確かIIScと学術協定を結ぼう

として出かけました。IIScというのは世界的にレベルが高い有名な大学です。ここに写真がありますが、二人で行ったこと、帰って来てから怒られました。

根崎 韓国とインドに行っているわけですよね（※）。

岡島 はい。インドの帰りに韓国に寄りました。下森先生と二人のほうが楽だと思いました。それを国際交流委員会で報告したら、「これは一体、なんたることだ。法政大学の恥だ」、「総長と常務理事と二人で行って、もし何かあったらどうするんだ」ととても怒られました。ただ、その時、意味がわかりませんでした（笑）。「何があるんですか」と聞いたら、「そういう大学はない。自分の地位を認識していない」、「総長も総長だ」と言われました。

北口 下森先生もインドに行ったことは思い出深いとおっしゃっていました。

岡島 総長は喜んでいたみたいです。その大学と学生交換とか様々な協定を結びました。私が理事の時はいろいろなことをやりましたが、あとは何もやっていないと思います。今はどうなっているのでしょうか。

根崎 今は数が増えて、協定校が100を超えました。

岡島 私が行った時に東大もIIScに来ていて、東大も協定を結びたがっていました。けれども、我々が先に協定を結んだので、「法政大学はこういう大学だ」って向こうの総長が聞くわけです。「オリンピックでは5、6名程度出ていますよ。優勝した選手もいますよ」と言ったら、「スポーツユニバーシティか」って言うので（笑）、「だけど、アカデミックもそうです」と返したのを覚えています。そのあと、デリー大学とも

協定を結びました。デリー大学に行った時、向こうのスタッフが総長と二人で事務員がいないことを怪しんでいましたが、「我々は IISc とこういうサーティフィケートを結んだ」と言うと、デリー大学はすぐ承諾してくれました。

根崎 事務的にはちょっとあり得なかったでしょうね。

岡島 あり得ないって怒られました。その後、タシケントに行く予定でしたが、途中で政変か何かあって、危険だからということで、タシケントには行かずに、そのままソウルの延世大学に向かいました。

根崎 総長と国際交流担当の理事と二人で行くということだから、筋としてはもちろん問題ありませんが、やはり事務が帯同していないというのはね。

岡島 ソウルに着いたら事務員が3人ぐらい来ていました。

根崎 法政からですか。

岡島 うちから延世大学に。

根崎 二人だけだから、何をしているのかと思ったのかもしれませんがね。

北口 途中から合流したのでしょうか。

岡島 そこで合流しました。確かに二人以上だったと思います。事務部長と、それから二人ぐらい付いていたと思います。我々も驚いてしまいましたが、本来はあり得ないことだということでした。あまり記憶にありませんが、下森さんもちょうとやってくれたので、不自由は感じませんでした。

根崎 ひとつは先生がよくご存じだということもあるんでしょうね。

岡島 そうじゃないと危ないですよ、特にインドは。向こうも、どこかに連れて行ってくれた

と思います。やはり総長を重んじて、ゲストハウスみたいな立派な部屋に泊めて、いろいろなところを案内してくれました。向こうの大学が、「NASA と提携してやっていて、99%はみんなアメリカに行ってしまう。だから、インドではアメリカの植民地大学じゃないかと言われている」と言っていました。

根崎 この頃から、どんどん増えていったんでしょうね。

岡島 国際交流は、数は少なくとも深くやったほうがいいと思います。数が増えただけだと意味がないですよ。

根崎 確かに、利用していないところもあるとは思いますが。

岡島 それで、うちの学生が15人 IISc に研修に行きました。30人ぐらい希望があったと思いますが、向こうに「30人は対応できない」と言われたので15人でした。

根崎 今、大学的には受験生に、「うちは世界の100大学と提携を結んでいます」と宣伝できます。

岡島 深ければいいと思いますけれどね。

北口 時代によって、人気のある地域とそうでもない地域と差があると言いますね。

根崎 たぶんそういうことが背景にあって、数というのはあると思います。

岡島 インドの IISc の先生を4~5人客員教授として1年間法政に呼んで、講義してもらったことがあります。冗談も言うし、学生にとってもウケていました。授業を受けていると、学生も英語がわかるようになるので、うちの学生も馬鹿じゃないと思いました。

根崎 先生は理事を1996(平成8)年4月に退任をされて、その後、先生を引き継ぎ稲田先

生が理事になりました。やはり小金井の再開発がまだ懸案事項になっているようですが、理事を辞められる時は肩の荷が降りたという気持ちでしたか。

岡島 理事を辞める時、もうこれで政治はやらないという気持ちでした。稲田さんをお願いすると約束していましたし、もうやる気はまったくありませんでした。稲田先生はやる気満々でした。私は秘密が嫌いで、口が軽い。私の性格に理事というのは合いません。

根崎 理事をやっていたらそう簡単には言えないこともたくさんありますよね。

岡島 言えないことだらけです。

根崎 6年間も理事をやられている中で、他の理事の方たちと集まる機会も多かったと思いますが、意見が対立することはありましたか。それとも、それぞれ分担が違うから、そういったことはあまりありませんでしたか。

岡島 対立は結構ありましたよ。

根崎 ちょうど、常務理事から理事に変わり目の時ですね。

岡島 そうですね。確かあの時、担当理事というシステムが変わったと思います。常務理事でも、理事でも、手当が違って、私には関係ないことでした。問題は、常務理事は、自宅に車が道路の都合で朝6時頃に迎えに来ることでした。6時に来ると妻が挨拶に行かなければならなかったもので、「迎えにこなくてもいい」と大学に言いました。それで、要するに常務理事に車を付けることをやめました。

根崎 今その話を聞いていて、総長だけでなく、常務理事にも車が付いていたことを知りました(笑)。

岡島 あの時に総長だけになりました。常務理

事になると、電車が遅れたとか何かあったら困るので、無駄なものではないという意見もありましたが、会議を遅らせればいいと言って、廃止しました。

北口 他の常務理事から苦情が来ませんでしたか。

岡島 タクシー券をもらって、タクシーが使えたので、僕には来ませんでした。

根崎 ひとつだけ、理事時代のことでお聞きするのを忘れていたことがあります。例の国際交流センターの事務部長になられた時がありますよね。あれは、もちろん理事だから担当ということですが、事務の部長に教員がなっていましたか。

岡島 職員事務部長が何らかの事情で不在の場合、事務部長は、担当理事でも兼務できました。

根崎 結果的に工学部が新学部になって、学科再編がありました。これについてはまあまあよかったんじゃないかと思われませんか。

岡島 学科再編成とかはやればできることです。けれども、3つのキーワードね。要するに、社会的に意義のある大学。そのためには、もともと法政大学はあれだけの「設備」と「場所」と「人材」を持っているのだから、頑張れるはずだと思います。頑張っただけというのが願いですね。あとは、何もありません。少し待遇が良すぎたと思います。良すぎるとだいたい駄目になっていきますね。

根崎 教員の待遇が良すぎる？

岡島 悪くは無いです。いや、大したことではありませんが、どうなんだろうと思う時があります。工学部しか知らないけれど、教員を見ていると本当に三流の学内政治家が多いのではと思います。

根崎 言っていることはよくわかります。

岡島 本当にあの時に間違っただと思います。今、思っても仕方がありませんが、でもやっぱり法政を採るしかなかったの、仕方がないですね。人情です。優秀だけが学問ではありませんが、優秀でなければ話になりません。それだけは言いたいです。けれども、徐々に立派な大学になってきたね。

12. これからの法政大学へ

根崎 最後に、学生や卒業生へメッセージをいただけますか。

岡島 こういう言葉が適切かどうか知りませんが、これしか浮かびません。鯛は腐っても鯛といますよね。社会では、東大は腐っても東大なので、法政は腐ったら本当に腐ると。だから、腐らないように頑張れと。この表現がいいかどうかかわかりませんが、私はこれ以上、思い当たりません。学生たちは能力があると、学生に教えています。そうすると年賀はがきに、「私は何々の部長になりました」書いてきます。それを見て、「ああ、よかった。あれで腐っていたら」と思います。

根崎 長く法政大学と関わって、学生や教員を見ていて、一番そのことを感じますか。

岡島 学生には、無限の可能性が 있습니다。それに、うちの学生は素直で真面目です。かなり真面目だから、きちんと教えれば伸びます。だから、こういうふうに言うんです。鯛は腐っても鯛だと。東大は腐っても東大だと。私もそうですが、君たちも腐ったら本当に腐ると。だから、腐っちゃ駄目だ、頑張れと。

根崎 教員にも何かメッセージをお願いします。

岡島 先端的でユニークで、存在感のある大学にしなければならない。それだけじゃないですか。ほかに何かありますか？

根崎 教員には研究者としての側面と、教育者としての側面がありますが、研究ではそのとおりです。確かに研究者である以上は、先端的でユニークな研究をしろというのは当然だろうと思います。

岡島 人間的に？

根崎 いや、先生が言われるのはごもつともだなと思って、これ以上はないといえないのかもしれないですね。

岡島 「存在感のある」というのは、全てを含んだ意味です。人間というのは幅があって、いろいろな社会をつくっていくんです。ただ、存在感はなくては駄目ですね。ユニークというのはけっこう難しいです。先端的というのは、本当に努力しなきゃ駄目ですし、やはり運もありますよ。指導者が先端的でしたらこうなるし、遺伝子の問題もあります。人間、幅広いから、その通りに生きましようということですね。

根崎 それぞれの役割がありますよね。

岡島 ありますね。いろいろなパターンがあって成り立っているのだから、自分を大事にすればいいんです。私はそう思います。私なんていうのは、人間的に見たらどうしようもない人間だと思います。

根崎 けれども、それでは常務理事になれません。

岡島 理事をやってよかったと思うのは、人間の痛みがわかったことです。職員とかいろいろな人がいて、いろいろな痛みを抱えて生きているわけです。それを考えることが多かったです。そういう人間の痛みというか、深さというか、

人間の生き方というか、それを少し教わったみたいですよ。あとは、何も残りません。

根崎 けれども、理事はなかなか経験できませんよね。

岡島 ぜんぜんできません。理事をやっていないとこれだけできませんでした。理事をやって良かったと思うのは、少し人間の幅を拓けてくれたかなという感じです。やっぱり理事をやって、人生マイナスではありませんでした。阿利先生や鬼塚先生、それから川上さんとか石坂さん、いろいろな人に会えたということは非常に良かったです。また、あの中では必死に議論しなければいけないので、いい加減なことを言っていられませんでした。それは勉強になりました。彼らは彼らなりにある意味でのポテンシャルを持っていましたね。

今日は何でも引き出されてしまいました。

根崎 先生、今日は長時間にわたり、さまざまなお話を聞かせていただき、ありがとうございます。これをもって、本日のヒアリングを終了いたします。

(終了)

(※) 下森総長と岡島理事は1995(平成7)年9月6日より韓国ソウル市の延世大学を訪問して学術・学生交換交流協定を締結し、台湾の中山大学やタイのタマサート大学も訪れた。また、1996(平成8)年4月13日からインドを訪問した際にはインド科学大学院大学との学術交流協定に調印、デリー大学との学術交流の打合せ後、中国の上海外国語大学にて国際相互交流の発展に向けた打合せを行った(法政大学広報部発行『学内ニュース』No.132・140、1995年9月16日・1996年5月15日)。